
桜の木の町

での

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の木の町

【著者名】

N1583D

での

【あらすじ】

亡くなつた人の遺骨を桜の木の下に埋める伝統がある町『桜木町』
僕は彼女の眠る桜の木に額をあてて彼女の事を思い出していた

(前書き)

某ブログで書いた
桜の木の町を再構築しました

テーマは『王道』

町を一望できる丘に登り
沢山ある桜の木の中の一つ
最も崖側に近い位置にある
桜の木に額をあて感慨に浸る

この木の本に彼女が眠っている

モンシロチョウがタンポポの周りをひらひら
と舞い、丘の桜が少しずつ咲き始める季節
数週間もしたら新学期が始まる
そんな時に彼女はいなくなってしまった

火葬場の細長い煙突から昇る煙が
澄んだ青色の空にかかる淡い雲に吸い込まれ
ていく

その煙は彼女に二度と会うことが出来ない事
を物語っていた
ツウツと目から一筋の涙が頬を伝つた

昼休みのサッカーの試合

相手の選手と激しく接触して足を痛めた

放課後になつても痛みがひかなかつたので
学校の帰りに病院によつて帰ることになつた

この町に一つしかない病院

住んでいる町の規模にしては大きい気がする

制服のまま受付を済ませ

名前が呼ばれるまで

近くにある椅子に座つて待つことにした

平日にしては人が多くて
結構待つことになりそうだった

足の痛みは段々酷くなつていくが

『君は・・・

桜木中学校の生徒さんかな?』

いきなり話しかけられて驚いた

後ろを振り向くと僕と同じくらいの年齢に見える人が立っていた

それが

彼女との出会いだった

この町には少し変わつた風習がある

死んだ人は桜の木の下に埋めるという風習が

昔は土葬だつたらしいけれど

今は火葬をして火葬後の骨を骨壺に容れ桜の木の下に埋めている

『木つて言う字は人を十字架に
貼り付けているように見えるのよね』

と彼女は言つ

病室の窓からのぞく

桜の木のある丘を眺めながら

『なんで?』

と僕は質問した

『幽霊つて木の下に出る事もあるでしょ
それは人のこの世に留まりたいって気持ちと
か、怨念や執念といったものが木に縛り付け
られているって思うのよ、
それは十字架に磔にされたも同等だともね、
ほら十字架つて木でできているし』

彼女はちょっとあたふたしながら

空中に絵を描くが如く

手を上下左右に動かし説明してくれた

『うーん、それだと先に木あつたのか
十字架があつたのかって話にならないか?
僕は腕組みをして
首をかしげる

『あ~もう』

彼女は黒い髪を少し搔いた

『そもそも私がしたかったのはそんな鶏と卵
のような問答じゃなくて、この町の事』

毛布をぼふつと叩く

それらの仕草が妙に面白かった

『この町と十字架と何の関係が
僕の首の首は更に横に傾く
傾けすぎて椅子から落ちそうになってしまつ
た

『十字架から離れる』

彼女は少し強い口調で言った

『ほら、この町つて人が死んだら桜の木の下
に埋めるじゃない』
彼女は推理物で言つ所の
犯人のトリックを暴く時のようにな
人差し指を立てている

『その話は聴いたことがある』
僕はかしげていた首を元の状態に戻して
体を少し前に出した

『それってこの町の人
死んだ人が桜の木に宿つて欲しいって
願つてやり始めたのかな?
と思って』

『確かに桜の木の下に人を埋めるのは
少し変つていると思うけれど
そんな理由でやるのかな?』

僕はおでこに手を当てて
病室の天井を覗き込む
其処には真っ白い壁と
蛍光灯しかないのだけれど

『もう、じゃあ何がきつかけだと思ひ
彼女は少し頬を膨らせてそう言った

『そうだなあ

村に伝染病が流行つて

それは人の死体からどんどん感染していって
それを沈めるには桜の木の下に埋めないと
けなかつたとか』

単なる思い付きで言つてみる

『あはは

何所の三流ホラー映画ですか
感染した人はゾンビ化するとか
そう言つた設定だつたり』
彼女は可笑しいとお腹を抱えて笑つた後
ケホッと少し咳き込んだ

『もつ、ちゃんと答えてよ』

彼女は笑いすぎが原因か
少し涙目になつていた

『真面目にか』

腕組みをして
目を瞑り
少しうなだれて
考え込む

『あの丘はこの町を一望できるよね
だから、死んだ人がこの町をいつまでも見守

れるようひつて思いを込めてやり始めたつてのは『

実は僕の母親が祖父が亡くなつた時に
凄く悲しかつた僕に対して
言つてくれた言葉だつた

『余り、私が言つたのと变らないね』
彼女は少し残念そうにしていた

『そうか？

そつちのは心靈スポット作成の為つて思えた
けれど、こつちはこの町の守り神を称えるよ
うなイメージだよ』

僕は笑いながらわう答えた

『心靈スポット作成つて酷い
じゃあ私が死んだら
桜の木の元に化けて出てやる』
彼女が笑いながら軽くそう言つた
ただ僕の心は少し
何かの針にでも軽く刺されたように
ほんの少しだけチクリと痛かつた気がした

あの日から最低でも一日に一度
この桜の木の元まで来てしまつ
僕は幽靈でも良いから彼女に会いたい
と思っているのかな

『ふふふ、はーっはははは』

僕が久しぶりに病室にお見舞いに来て

椅子に座るなり

彼女が悪役の如く高笑いした

『急にどうしたの？

悪いものでも食べた？？』

余りに急だったので

椅子から仰け反った

『今度の月曜からね

また、学校に行けるようになるの

実際は日曜日から退院だけど』

彼女がこっちに向けて力強いVサインをして

はしゃいでいる

こんな笑顔を見たのは初めてだ

『おお、おめでとう』

彼女の笑顔を見て

なんだか僕まで少し嬉しくなって

自分でも微笑んでいるのが解つた

『そりゃあ

丁度、今度の日曜日サッカーの試合をやるつ

て言ってたよね』

一瞬悪寒が走った

彼女が何かを企んだ時の悪役の如く

いい笑顔で微笑んでいた

しかし、今日は何故ここまで悪役仕様なのか

『さうだけど、試合があること言つたかな？』
前に来た時にも言つてたのかな
ちよつと記憶が曖昧だな

『前に来たときに言つてましたよ

で、そのサッカーの試合だけど
私が応援に行つてあげてもいいわよ

つてなにその嫌そうな顔は』

彼女はちよつとショックを受けたのか
しゅんとなつてしまつた

『え・・・いや

ベシニイヤデハナイデスヨ』

やつぱり悪寒の正体はそれか

『物凄く凄く棒読みに聞こえるんだけれど』

彼女がむうつと唸つて

こつちを睨んでる

『いや、

本当に嫌なわけじゃないんだけれど・・・』

頭を抑えて俯く

なんと言つたらいいのか言葉に悩む

『解つた

女の子が応援に来るのが恥かしいんだ』

まさに、図星

ドキリとして

数ミリほど体が浮いた気がした
恥かしいというのもあるけれど

普段他の部員に言っている
「ある事」も要因の一つだった

『あはは赤面しちゃった

図星なんだ～可愛い』

彼女はベットから乗り出して
ふにふにと僕のほっぺを突く

日曜日

近隣の中学校のサッカー部が集まって
3校総当たりで試合が行われる

『先輩さつきからきょろきょろして
なんか人を探してるみたいだけど
どうしたん?』

後輩の部員が話しかけてきた
急に後ろから話しかけられたから
驚いて、少しうわっと声を上げてしまった

『え、別にいつも道理だけれど』
いつもと変わらない様にしていると
思つてたが
後輩に言われてみると
確かにいつもより
客席を見ているような気もある

『あからさまな程におかしいですって
先輩はいつもは其処まで熱心に客席のほう
見ていませんから・・・まさか！！』

後輩がハツつと何かに気がついたようでも
どこぞの家政婦かの様に驚いている

『先輩いつも

サッカーはもてる為じゃなくて
ただ楽しいからやつてるんだ

つて言ってたのに

まさか彼女ができる

その彼女が応援に来るから

さつきからきょろきょろと』

『違うそんなんじやない』

必死に否定したが

逆にその必死さが仇となつたみたいだ

後輩は何か確信めいた表情をした

『大変だ』

先輩に彼女ができるぞ』

後輩はそう叫びながら

ベンチの方へ走つていく

だから

嫌だつたのに

まあ、自分の不注意だから仕方ないか

はあ、と深くため息をついて

もうすぐ一試合めが始まる時間だつたので
トボトボとベンチの方へ歩いていった

僕は

チームメイトにからかわれながら
試合に臨んだ

一試合目 0 - 8

元々僕の中学のチームは
強いチームで無いけれど
ここまで酷い試合は久しぶりだった

大量失点の原因
監督が言うには
守備の中心人物
最終的なストッパーの役割を果たす人間が
集中力を欠いて怠慢なプレーをしていた
からだそうだ

僕の事だつた

確かに今日は

相手FWに結構抜かれてたし

不必要なファールが多くつた気がする

怠慢なプレーをした罰として

二試合目はベンチスタートになつた

二試合目の相手は

長身の選手が多く

セットプレーからの失点が多くて

前半で既に5失点

後半から長身の選手に対抗するために

出場したけれど

その後点差が縮まらなくて

また負けた

「試合田はちゃんと集中してプレーが出来た
相手のクロスボールをとことんクリアした
『これが僕の本気さ~』

とか叫びながら

今日のサッカーの試合
結局彼女は来なかつた
少し余裕があるときに

観客席のほうを見ていたけど

其処には選手の親御さんや兄弟ばかり
僕が見落としていただけだつたかもしけれない
ただ、何故か彼女が居たら絶対見つける事が
出来るという確信があつたけど

試合も散々だつたし

チームメイトからも色々とからかわれるし
彼女も来なかつたし

今日は仏滅つてやつなのか・・・

しかし

サッカーの試合に負けたことよりも
彼女が来なかつた事のほうに
ショックを受けている気がする
何故だろう?

この日

彼女の病状が悪化し

退院することが伸びた事を知ったのは
まだ先の事だった

『ごめんね、応援に行けなくて』
彼女は凄く申し訳無さそうに謝り
見たかったな」と眩いていた
その気持ちだけでも少し嬉しかった

『その気持ちだけで嬉しいよ
正直な所来なくて良かつたかもしれない
2試合ともボロ負けだつた』
溜息をついて

俯く

『あらあら

私の応援があつたら勝てたのにね
彼女は僕の頭をよしよしと撫でながら
微笑んでいる

『その根拠は何所から來てるんだよ』

『ないよ』

彼女はあつむりとそう答えた

『ないのか』

僕は呆れて肩を落とした

『でも、驚いたよ

病状が悪化して退院できなかつた

つて聞いたときは『

初め聞いたときには耳を疑いそうになつた
でも、彼女がまだ病室に居る事が
その証明だらう

だから、彼女と病室で再開した時は
自分の事では無いのに
物凄く心配だつた

『大丈夫よ

ちょっと咳き込んだだけだつたのに
周りが大騒ぎしだして
退院延期になつただけだし』
彼女は毛布ギュッと握り締めて
つまらなそうにそう答えた

『それだけ

皆心配してゐつてことだよ』
ふうっと胸をなでおろす
何事も無いようならよかつた

『そつか』

彼女は少し照れているように見えた

『まあ

その分良いこともあつたし』

彼女は少し嬉しそうに笑つている

『良い事?』

退院延期になつて良かつた事
もう、さつぱり思いつかない

『手術をする日程がやっと決ったの』

彼女は胸の前に両手を合わせて微笑んでいる

『おおっ・・・

つて手術をしないといけないほどだったの?』

驚いた

いつも來ても変わらず陽氣にしているから

そこまで

深刻そうな病気では無いと思っていたけど
むしろ、本当に病気で入院しているのか?
と思う事もあつたぐらいなんだけど

『一応ね

退院つて言つても

手術の日程が決るまでの

一時的なものだつたし

でも、手術が無事に成功したら

やつと

普通に学校生活を送れるようになるんだ』

彼女は凄く嬉しそうだつた

その喜びは多分

少し学校が鬱陶しくなつてなつている

僕にはわからないだろう

長い間

学校に行けずに

入院生活をしている

彼女だけに解る事だと思つ

でも

彼女の喜んでいる笑顔を見ていると
僕も不思議と嬉しくなった

『そりなんだ

無事に手術が成功するといいね』

僕も笑顔でそう答えた

その手術は無事に成功した
でも、彼女は死んでしまった

『と言いう事で

無事に手術成功しました』
病室で彼女が満面の笑顔を振りまきながら
拍手をした

『良かつた・・・』

言葉はそれだけしか出なかつた
うつむいて
グッと両手に力がを入れる
そうしないと
涙がこぼれできそうだった

『そして

朗報がもう一つ』

彼女はその事に対しても
ちょこっと
もつたいぶつた素振りを見せている

ドラマロールを口ずさむ姿は少し滑稽だ

『わたし、桜衣高校に合格しました!!

あそここの制服は凄く可愛かつたから

どうしても行きたかつたんだ』

彼女は毛布ギュウっと抱きしめて

上半身を左右に振りながら喜んでいる

『え・・・凄い

あそここの倍率高いうえに

入試が凄く難しいって聞いてるよ

いつたいどんな裏口入学を『

話だけなら聞いた事がある高校だった

県下で最も

有名大学に合格者を出している高校で
偏差値もありえないくらい高かつた気がする

桜をイメージした制服も有名で

どこぞやの有名デザイナーさんが

デザインしているらしい

サッカー部の部員も

その高校の女子生徒を大絶賛してたような

『ちゃんと入試を受けてますよ

入院してると結構暇だから

勉強もちゃんとしてたし

一応成績優秀なのよ』

彼女はむうつと唸りながら

毛布を軽く叩いている

『冗談だよ、冗談

でも、やっぱり

入院生活つて暇なんだ』

僕だったら

長い間入院した場合どうしてただらう
・・・勉強はして無いだろうな

『まあね

余程の暇人くらいしか
お見舞いなんて来ないね』

彼女は視線を少しの間だけ窓の外に移した
その横顔からはなんとも言えない
寂しさの様な物が伝わって来た

『余程の暇人つて
それは僕の事か』
はあつと深く息を吐いて
頭を抑える

『さて、どうかしら』

彼女はクスクスと笑いながら

僕の頬をまたぶにぶにと突いてきた

その日見た笑顔が

僕が見た最後の彼女の笑顔になるとは
微塵にも思わなかつた

彼女が眠つている桜の木
色々な景色を見ることが出来なかつたら
せめて彼女の眠る桜だけでも

広く多くの物が見れるようにといふ事で
一番見晴らしの良い場所に立っている

僕はあの日から

毎日その場所に通っている

彼女に会うことが

出来ないとわかつていながら

彼女に言い残した事があつた気がして

そして

ここならその言葉を思い出せる気がして

丘の上の桜は桃色の花びらを
枝いっぱいに咲かせていた

ふわっと

一陣の風が吹いて

桜の花びらが舞つた

少しの時間

視界が奪われた

僕が再び目を開けたとき

目の前に女人人が立つていた

僕の通つてゐる高校の制服を着ている

砂が目に入ったのか

まだ視界がはつきりとしない

でも、高校にこんな人いたかな？

しかし、可愛い

制服がよく似合っている

うちの学校でここまで制服が似合う人って
いたかな

視界がはっきりしてきた

そして、女人の顔を見て驚いた
いや驚く何て行動さえ出来なかつた

そこには

僕が見間違える事は絶対無い人が
桜の木の下で眠っているはずの
彼女が立っていた

幻？幽靈？

いやいや

今は夕方だから幽靈は無いか
幽靈は夜でてくるものだ

いきなりの事で

頭が中がぐるぐるまわっている

心臓がバクバク言っている胸が苦しい

・・・

声がない

まるで金縛りにあつたときみたいだ

『まつたく

毎日この桜の木まで来てるよね
どこのストーカーさんですか』
彼女は昔と変わらない笑顔で
昔と変わらない口調で
昔と変わらない軽口を叩いてきた

『酷い事を言つね

ちゃんと花も供えにきてるよ』

その軽口を聞いて

少しだけ緊張が融けた

心臓の苦しさは相変わらずだけど

『ははは、確かに

でも、供えるんだつたら
もうちょっと私好みの花を供えてなさいよ』

彼女がいつもの様に

僕のほっぺたを突こうとした

ただ

その指はスウッと頬を通り抜けてしまった

『やはり

幽霊は触れないのね

ちょっと残念』

彼女は物悲しそうに

人差し指をじっと見ながら

軽く溜息を突いた

『やつぱり、幽霊なのか
でもどうやって此処に?』

幽霊つてのは

もつと暗くなつてから
うらめしやへ

つて言いながら出てくるものじやないのか

『言つたでしょ

私が死んだら桜の木の元に
化けて出てやるつて』

彼女がうらめしやへ

とたまに絵本とかで見る
幽靈のポーズを真似ている

『と言つても

私も自分がなんで此処に居るのか
解らないけれどね』

彼女は腕を組んでうんと悩んでいる

『まあ、特に気にしなくていいか
一番見せたかつた人に

この制服姿を見せる事が出来たし』

彼女はスカートの裾をもつて
クルツと一回転した

『どう?似合つでしょ』

彼女はニコツと笑つた

今までで一番かわいい笑顔だった

余りの綺麗さに一瞬言葉を失つた

『うちの学校の誰よりも似合つてるよ』

見惚れるつていつこいつ事をいつのか

『でしょー』

彼女は照れながら喜んでいる

『あ・・・』

彼女にずっと

言い残していた言葉に気がついた
それは、凄く簡単な言葉で
とても大切な言葉だった

『ありがとう』

彼女は僕の言葉を遮つて
そう言った

『いつも

お見舞いに来てくれてた事
私は凄く嬉しかったんだよ
私の入院中の数少ない楽しみだつたんだ
彼女は言葉を震わせながら
優しく微笑んだ

『良かつた

やつと、言えた

私がずっとと言いたくて、言えなかつた事
もう言えるチャンスが無いと思ってた『
彼女の声は少しかすれて
目一杯に涙を溜めていた

『最後まで笑顔でいようつて思つてたけど

ちょつと無理そつ『

僕は初めて

彼女が泣くところを見た
できる事ならば

ギュッと抱きしめたいけれど

触れる事が出来ないから

それは無理で

その事が凄く悔しかった

また風がふいた

桜の花びらが舞つた
たくさん舞つた

まるで吹雪のように

凄く綺麗だった

桜吹雪が止んだとき

彼女もいなくなっていた

『最後の最後まで

一方的に言いたい事、言つてきて

こっちの言いたい事を言つし前にサヨナラかよ
力強く桜の木を叩いて

桜の木に頃垂れる

『ありがとつ

つて言うのは僕も言いたかつた言葉なのに

僕は泣いた

声を出して思いつきり泣いた

何度も嗚咽しながら泣いた

泣きつかれて

目を開けたら

辺りはもう暗くなっていた

僕はとぼとぼと坂道を下つて行く

桜吹雪の中で聞いた

彼女の最後の言葉を思い出す

その言葉を聴いて

何故僕が桜衣高校に行つたのか

解つた気がした

空を見上げる

空には色とりどりの星が瞬いている

僕は両を空のほうへ突き出して

星を掴むかの様にグツと拳を握った

そして、やつと

自分がやらないといけない事が解つた

決意を固めた僕は

駆け足で坂道を下つた

坂を下りた後

僕は振り返った

彼女の桜に向つて

最後に一言だけ呟くよつと言つた

『ありがとう』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1583d/>

桜の木の町

2010年12月12日01時46分発行